
METAL GEAR SOLID RISING

ジェフティ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

METAL GEAR SOLID RISING

【Zコード】

Z4304Z

【作者名】

ジョン・ティ

【あらすじ】

メタルギアソリッド2、ビッグ・シェル事件から数年後。S3計画の被験体として事件に巻き込まれた雷電はその後、愛国者達に拘束された。

度重なる人体実験の最中、彼に一人の女性が手を差し伸べる。ビッグママ、かつてEVAと呼ばれた女性。

愛国者達により、全てを奪われた雷電は、オルガとの約束を果たすべく、再び戦地へと赴く。

M E T A L G E A R S O L I D の 一 次 創 作 で す 。 か な り の 口
一 ペ ー ス に な る か も し れ ま せ ん 。

Protozoa(前書き)

メタルギアソリッド2、メタルギアソリッド4の内容が理解できているとより一層楽しめると思っています。
それでは、どうぞ。

少年は根っからの兵士だった。

彼のいる場所に漂うのは戦の香り。

ガンパウダーの香りが染み付いた衣服をまとい、血塗られた土の上を駆ける。

彼にはそれが何のためなのかは分からぬ。でも、そうしなければ自分は殺される。だから殺すのだ。

コピー品のカラシニコフのトリガーを引く。途端、眼前の男は頭から血を吹き出して倒れる。当然のことだが、彼にはそれが酷く面白く見えた。

そうして人を殺していく。ゲーム感覚で。

悲鳴が戦場に満ち溢れて、彼の耳に響いていく。それが何とも心地よかつた。

目を覚ます。

乱している息を必死で整え、状況を整理する。

彼がいるのはベッドの上。薄いタオルケットを放り投げてベッドへと座る。

またこの夢か、と彼はうなだれる。

ジャック・ザ・リッパー、切り裂きジャックと呼ばれた少年は、雷電と名を変えた。それでもふとした時に過去の自分が現れる。

純真無垢だったが故に、殺しに何の嫌悪感も抱かなかつた自分。それが怖かつた。

今からまだ2年ほど前に起きたビッグ・シェル事件。そこで彼は、少年兵として彼を仕立て上げた張本人である男、ソリダス・スネークと再会した。そして、今まで忘れていた忌まわしき過去を思い出

したのだ。

ローズ・マリー……自身の恋人であり、良き理解者である彼女には、酷いことをしてしまったと雷電は思った。そして恐怖から逃げた結果がこれだ。

「被験体04、雷電を今すぐ連れてきなさい。」

女の声。

その声は悲鳴と共に反響した。

「やめてくれ」「殺さないでくれ」「命だけは助けてくれ」そういった悲鳴の中、雷電は呼ばれる。

そうして彼は泣々、薄暗い部屋を出た。

光源の強いライトが、雷電の顔を照らす。雷電はそれに堪らざと目を瞑つた。

「ふむ、やはり貴方が一番の出来ね」

白衣姿の女が言つ。まるで挑発するかのよう。

「お前は、俺をどうする気だ?」

雷電は問つ。

「決まつてゐるわ、S3計画を再びやり直す。私はそのために愛国者達に入れられたんですもの」

雷電は黙つて女の顔を見る。

隈が色濃く残つたその顔。そしてそれをむりやりに隠そうとしている化粧が逆効果を起こし、彼女を怪しく見せる。

彼女はストレンジプリファレンス。この薄汚い研究所で彼女はそう呼ばれている。

異常な趣味。その意味を持つ名前の通り、彼女は狂つてゐる。現に雷電の体がそうだろう。

もはや人間とは呼べないその体。ロボットと呼んだ方がしつくらくるのではないか、などと思つほどだ。

狂気のマッドサイエンティスト、とは彼女のような人間の事を言つ

のだろう。と雷電は半ば呆れながら彼女を見ていた。

「なに？ その反抗的な目は？」

ストレンジプリファレンス、彼女は雷電の顎を持つと、それを持ち上げる。

「いや、なんでもない。それよりお得意の実験を始めたらどうだ？」

「そうね…… そうしましようか」

すると彼女は、工具箱のようなものを取り出す。ペンチにドライバー、ニッパーにドリル。もはや拷問とも言えよう。

「さて……はじめましょうか？」

彼女はニタリ、と笑みを浮かべ、舌なめずりをしてみせた。

体の節々が痛む。機械の体といえども、あがこちいじられればそれは痛いものだ。

雷電は愛国者達の傘下であるPMCの兵士に独房へ入れられると、窓から外を眺めた。とはいっても眺めるほどの大さの窓ではない。そういうえば、ローズと一緒に見た脱走映画では、こいつた窓から脱出したり、穴を掘つたりして脱出していたな、と雷電は思い出す。しかし、この愛国者達の牢獄ではそうはいかない。ナノマシンによつて完全に位置情報を把握され、センサー類が脱走者を感知する。雷電は、ローズ、そしてオルガに申し訳なく思った。ビッグ・シール事件で子供を助けると約束したはずが、今はどうしようもない。果てはローズに対しても、数多くの心配をさせた挙句、このように逃げ出した。

頭を抱えることしか無い。

” 今の俺に何が出来るんだ？”

雷電は深く考え込んだ。

途端、彼は頬に熱気を感じた。思わず目をつむり、それから目を背ける。

「貴方が雷電？」

誰かが聞いた。

「アンタは……」

視界の先、雷電が振り向いた先からは光が差し込んでいた。そして

その光の中、ほこりが舞い散る中に女がいる。

「私がママ……ビッグママよ」

「ビッグ……ママ？」

雷電は首をかしげて言った。

その目線の先、派手な赤色の服、そして大胆にも胸元を露出している彼女は、そのてにスイッチのようなものを持っていた。おそらくC4か何かの起爆装置だと雷電は考える。

「そうよ、私は、対”愛國者達”レジスタンス、失樂園の戦士のリーダー。」

「その失樂園の戦士のリーダーがこの俺に何の用だ？」

「守つて欲しいの」

「何を？」

雷電は顔をひきつらせ、そう問つた。

「ビッグボスの……遺体」

彼女がそう言った途端、銃声が鳴る。爆発騒ぎでPMCのパトロールが確認に来たのだ。それに対し、ビッグママは冷静にホルスターから銃を引きぬく。

年代物の銃だ。雷電は一瞬、モーゼルかと思ったが、少々形状が違つたことからコピー品だと理解した。

幼い頃から少年兵として育てられた彼にとつては銃のコピー品も本物も大方見分けはつく。あのモーゼルも使つたような記憶があつた。そうして彼女は、トリガーを引く。地面と水兵に向けられた手、銃を横にして撃つそのスタイルは”馬族撃ち”と呼ばれる。マズルジャンプを最小限に抑えたムダの無い射撃。放たれた鉛はしつかりと兵士の頭へ着弾する。

「何をしているの？乗つて！」

ビッグママが言つ。雷電は言われるまま彼女に先導に従つた。

これまた年代物のバイクが一台、彼女の後ろに駐車してある。

「待ってくれ、アンタは何者なんだ。なんで俺を助けるんだ?」「

「言つたはづよ、私は失樂園の戦士のリーダー。そしてあなたに力を貸してもらいたい」

雷電は、頭を搔く。すると後方から再び銃声が鳴り響き、雷電はその手を下ろした。

「貴方にも関係のあることよ、私達は愛國者達を……リキッドを止めなければならない」

「リキッド……」

雷電は、思わずその名を口走る。

リキッド・スネーク。

シャドーモセス島事件でフォックスハウンドを率いて決起を起し、リーダー。そして彼は伝説の英雄、ソリッド・スネークによつて殺害された。

いや、正しくは殺されていない。雷電は、ビッグ・シェル事件の際、アーセナル、ギアの甲板でリボルバー・オセロットの体を奪つたリキッドの姿を見ている。

「早くしなさい、行くわよ！」

雷電は、その声でハツとして、バイクにまたがる。するとビッグママはエンジンを吹かし始めた。

「おい、大丈夫なのか？」

雷電が問う。銃声はもうそこまで迫つてゐるのだ。

「待つて、まずこれを」

途端、ビッグママは注射器状のものを雷電の首筋へと突き刺す。激痛が首から全身へと行き渡る。

「アンタ……何をして……」

「ナノマシンの抑制剤よ。被験体用の安いナノマシンなら、死滅させてしまうほどの威力のね」

首筋がズキズキと痛む。雷電は、患部を右手で押される。

「私がバイクを降りるのは、死ぬ時か……恋をした時か……」

彼女がそう呟く。雷電は何のことかと考へたが、その間もなく、バ

イクは勢い良く発進した。

それから数分間、雷電はビッグママの運転するバイクの後ろに乗っていた。

追っ手は簡単に振り切ることが出来た。雷電にはそれが震なのではないかと疑ったが、それでも今は彼女を信じるしか無かつた。それ以外、愛国者達の施設から脱出する術などなかつたのだから。

すると、信号待ちを食らつ。

「チツ……」

彼女は舌打ちをすると貧乏ゆすりを始める。

それからややあって、信号が変わるか変わらないかの瀬戸際、対向車線の車がこちらの車線へと移つた。

真っ黒いバン。少々異質なその車はバイクに横付けすると、途端にパワーウィンドウを開ける。すると運転手が親指で後ろを指す。

「乗れ……ということか？」

雷電はビッグママに問うた。しかし彼女はそれには応えられることなく、

「遅かったわね」と怒り気味に言つ。

そのままバイクはバンの後方へと走る。幸いなことに後ろに車はない。

そういえば今は何時なのだろうか？雷電はふと思つた。日が昇り始めているから早朝だということはわかる。

バンの後ろがゆっくりと開いた。中はだいぶ広く、バイクは簡単にに入る。

雷電はそのまま、バンの中へと乗る。

「待ってくれ、状況を教えてくれ

雷電が言つ。

「だから何度も言つてるでしょう？」

「 もうじやなー、もひと……もひと詳しく述べてくれ
雷電がいつの間にかビッグママ、ほふう。と息を吐いた。

「愛國者達は、ナノマシンを使い、戦場を統治するシステムを創り上げた。 Sons of patriot。それを手に入れるのがリキッドの狙い」

「待つてくれ、リキッドはそれをどうやって手に入れるつもりだ？「システムにアクセスすればいい。でも、それにはビッグボスの遺体が必要なの」

「なぜ？」

雷電が問う。

「……彼のDNAがシステムの鍵になっているの。だからリキッドはそれを欲しがっている」

なんてことだ。雷電はうなだれる。

SOPシステムについては、前々から雷電も話を聞いていた。戦場を完璧に統治するシステム。それによつて戦争はPMC同士の代理戦争となつた。

「それで、俺は彼の遺体を守れといつのか？」

「ええ、それともう一つ」

ビッグママはそう言つとレジスタンスの一員から何かを受け取る。写真のようなものだ。

「貴方には、私の息子も守つてほしい。私の……ビッグボスの息子を」

写真を雷電へと差し出す。その写真に映つていたのは白髪の老人……

「これは……！」

雷電は動搖する。

「まさか……アンタはこれが彼だといつのか？」

「ええ、そのとおりよ。彼がソリッド・スネーク。伝説の英雄」

嘘だ。と雷電は思った。

彼がこんなに老けていると？冗談ではない。

雷電にとつてソリッド・スネークは英雄であり、借りを返すべき相手だった。雷電はビッグ・シェル事件で、彼に何度も助けられたのだ。

「……交換条件がある」

恐る恐る、雷電は進言する。

「サニーを……助け出したい」

「サニー？」

ビッグママは頭にクエスチョンマークを浮かべる。

「そのサニーというのは？」

「オルガの……ゴルルゴビッチの娘だ。俺はビッグ・シェル事件に時、彼女と約束した。サニーを必ず助けだすと」

雷電がそう言いつと、ビッグママは口を抑えながら頷く。

「そうね……いいわよ。問題は、彼女がどこにいるか。といつところだけだ」

「……」

雷電は何も言い返せなかつた。

「これは言つてみたもののサニーがどこにいるかなど分からないからだ。宛なんてどこにもない。」

「どうすればいい……ローズ……」

彼女の名を口にする。

俺はまた、彼女に頼るうとしているのか。いいのか、それで？自分に言い聞かせる。

じゃあ、どうすればいいんだ？

そう考える内、まぶたが重くなつた。必死に目を覚まそうとするも上がらない。

そうして雷電の目の前が暗闇となつた。

このような経験は何度目だろうか。

愛国者達に捕らえられていた時もこのように突然意識を失つことがあった。

そうしたときはいつも必然的に例のマッシュサイエンティストの下で縛り付けられていた。

しかし、今回は違う。

彼がいるのは教会だった。

教会の中、ポツンと置かれた診察台のようなベッドの上で寝ている。近くには様々な機械があり、それぞれが電子音を鳴らしている。

「……」

雷電は黙つて己の体を見た。

機械と化した体に「コードが繋げられている。

雷電はそのコードをむりやりに引きぬく。すると、機械類が一気にエラー音をかき鳴らす。

「以外に早く目覚めたわね」

どこからか聞こえた声。思わず体を跳ねさせた雷電は、すぐさま声のする方を向く。

「なに？ その怖い目？」

その声に聞き覚えがあつた。嫌というほどじ。

「お前は……ストレンジプリファレンス……」

なぜ彼女がここに？ まさか嵌められたとでも言つのか？ 最悪の事態が脳裏をよぎる。

すると彼女と同じ方向から一人の女が現れる。

派手な赤を来た女。年不相応な奇抜な格好である。

「彼女は、マッドナー博士。私たちの味方よ

「味方……だと？」

雷電は、その答えを聞き、目を瞬いた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4304z/>

METAL GEAR SOLID RISING

2011年12月16日22時53分発行